わたしの聖戦（ジハード）

◎◎女性が働くということ◎◎ 89

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

病院と町づくり

「シャッター通り」や「過疎化」の言葉に見てとれるように、地方の衰退と疲弊は相変わらず続いており、なかなか出口が見えてこない。時に、町づくりや商店街の活性化などという取り組みを視察する機会があるが、もともと少子化が進む一方なのだから、いずれも恒久的な効果を生むのは難しいように思う。

人が集まる要因は色々あるだろうが、高齢化と病気の慢性化が進むと「病院」が町づくりを担うという発想も珍しくなくなった。病院のサロン化が指摘されて久しいものの、サロンであれカフェであれ、確かにどんな地方でも大きな病院の混雑ぶりはどこも似たようなものである。3時間待ちの3分診療といわれてもいるが、その改善がこれまたなかなか進まないところも多く、町全体が過疎化なのに病院だけは賑わっているという、なにやら奇妙な様相をさらけ出している。

いったい病院の役割とは何だろうか。いうまでもなく、病で苦しむ人々を助ける場所、である。検査や手術や投薬などあらゆる最新の医療技術を用いて病人の痛みや不安や不都合に向き合う専門性の高い施設である。

かつては、「家」が人々を強く支配していた時代があった。もちろん今でも「家族」を重んじる風潮がまったく廃れたわけではない。しかし、翻って考えてみると、少し前とはすでにずいぶん様子が異なっている。ほとんどの人が病院で出産し、半分以上の人々が施設で最期を迎える事実だけをみても、「家」の存在感が希薄になっていることがわかる。死に場所の選択肢が増えたというより価値観ががらりと変わってしまったのを思う。

ある病院では、家族に先立たれた夫や妻らをケアする取り組みをはじめたという。確かに家族の死は、人々にとって強いストレスになり、場合によってはうつなどの精神疾患を発症することがあるため、適切な早期の治療が功を為すケースもあるだろう。残された家族の癒されない気持ちも充分に理解ができる。しかし、それは果たして病院の役割なのだろうか。医学的な対応が必要な場合もあるだろうが、すべてを病院の、医学の中で対処しようとする傾向にはなんとなく違和感を覚えてしまう。それとも、特に地方の病院はそれほど深く人々の生活と心に入り込んだ存在になりつつあるのだろうか。

はっきりしているのは医学より勝るものはいくらでもあるということだ。たとえば宗教がそうだ。たとえ輸血をしなければ命がないとわかっていても、本人が宗教上の理由でそれを拒否すれば、輸血という治療行為を行うことは許されない。

病院の発祥はどこの国でも宗教と密接な関係があった。しかし、技術優先、長寿万歳の風潮が高まるにつれ、医学と宗教はときに相反するところに位置するようになっていく。しかもそれぞれが本来の役割を充分に果たしているとは言い難い。もし、それができていれば、人々がこれほど日々不安であるはずがないからだ。

どんなに患者が押し寄せても、病院が町づくりの中心になる時代はどこかおかしい。町づくりはあくまで人づくりに通じる固有の文化なのであって、科学や医学ばかりに偏ってはいけないように思えてならない。

イラスト・三浦義雄